

清明

杜

牧

清明の时节雨纷纷

路上の行人魂断欲

借问酒家何处在有

牧童遥指杏花村

【作者】杜 牧(八〇三〜八五二年)晚唐の诗人。字は牧之「ぼくし」、号は樊川「はんせん」、陝西省長安県の人。名家の出身にして八二八年進士に

及第後、地方、中央の官を歴任し中書舎人(ちゆうしよしやじん)となつて没す。資性剛直、容姿美しく歌舞を好み、青楼に浮名を流したこともあつた。樊川文集二十卷、樊川詩集七卷あり、阿房宮賦「あぼうきゆうふ」は早年の作にして文名を高めた。年五十歳。

【語釈】\*清 明…清明節の日。二十四節氣の一つで春分の日から数えて十五日目 \*粉 粉…多く。さかなさま。

\*路上行人…路傍の旅人で。 \*欲斷魂…心が滅入る。もの悲しくなる。 \*借 問…借は仮。試みに問うこと。

【通釈】清明の季節であるのに、雨は降りしきっている。雨やどりをして一人の旅人は、酒でも飲んで滅入る心を晴らそうと思ひ、通り合わせた牛飼いの少年に、近くに酒屋はないかと尋ねると、はるかかなた、杏の花さく村を指さして教えるのであつた。

【備考】杏(あんず)の花咲く村落の風景が絵の如く浮かぶ、絵画的な叙景詩である。